

# 秋 貴

## 目 次

1、 鞍 馬	..... P 2
2、 六波羅	.....P22
3、 都落ち	.....P40
4、 薩 摩	.....P51
5、 門 司	.....P60
6、 輕井沢	.....P79

## 1, 鞍馬

時は1170年、

鞍馬川と貴船川が合流する鞍馬の麓で生を受けたその少女の名は秋貴と言った。彼女はこの春に10歳となった。

京都の鞍馬地域は厳しい冬が漸く終わり、鞍馬道中にある石の割れ目から水が白く湧き出て梅が開花する季節となった。

彼女が生まれる2年前には鞍馬山に牛若丸が入山し、午前は仏道修行、午後は兵法の修行に明け暮れていた。

彼女の側の家と言えば、一弦琴を引く遊女の居宅、蠟燭と灯明油に提灯、塩穀物と和紙筆墨等を売る小間物屋の2軒しかない。

ここから京の方角を眺めると、一面原野が広がり緩い下りが遙か京の方に続いており、京の中心部に出るには10kmも歩かねばならない。

北を観ると、幅が1沓程の狭い一本道がくねくねと鞍馬寺の方に続いている。

3年前太政大臣の位を極めた平清盛の権勢は日に日に強まり、もはや揺るぎないものになっていた。

現代にあっても鞍馬詣での道路は両側に張り付くように家が並んで、道路から30mも離れると直ぐに灌木が覆うような場所であるが、当時の鞍馬街道は道路の左右が鬱蒼とした木々に覆われていて、道幅も狭く当に登山道に近い道路であった。

秋貴は冬の辛い寒さだけは苦手だったが、物心付いた4～5歳頃からこの地の四季や環境が好ましいと思えるようになった。

その理由は、四季それぞれの季節の風情と自然からの恵みだった。

月明りが無い漆黒の闇も、夜半に飛ぶ雉や山鳩の侘しい鳴き声も大きくなるに連れ慣れた。

春は、梅や山桜の見事さは勿論、雑多な草花が芽吹き始め、筍もよく採れた。鶯がそこそこに鳴き、鹿、狐、狸、兎、猪等、多くの動物たちが姿を見せ始めた。

夏は、蝶蝶や蜻蛉や鳥達が競うように飛び交い、鞍馬川は、鯉や鮒、鮎、そして、京都の川だけに生息する小魚で溢れていた。

山や鞍馬道は、各種のツツジの赤や黄の彩りが鮮やかだった。

秋の紅葉は見事だし、栗、胡桃、梨、キノコ等収穫も楽しみだった。

冬も、うっすらと雪化粧した山々やお寺の景色は気に入っていた。

ただ、底冷えする寒さと、月の無い夜の漆黒の闇だけは好きにはな

れなかった。

今年の冬の間、この家が寒さと雪に耐え切ることが出来るのか一抹の不安が消えなかったが、囲炉裏に使う芝も火鉢の炭も一昨年の秋からは母親は十分備える様になっていたのので、以前の様な過酷な冬ではなかった。

それと、藁葺屋根は板張りに、外壁は漆喰壁となり、粗末な木製の火鉢は、金属製のものに変えられていた。

生活は、徐々に豊かになっていく様だった……。

流れ白拍子の心付けは僅かな筈だが……等、思い出しては不思議に感じていたが、母はどうやって糧を得ているのかこの頃は理解できる。

母親の職業は、白拍子だ。

時折、何故白拍子になったのだろうか？何処で生まれたのだろうか？と考えることがあったが、その質問は母を苦しめるだろうという事は理解出来る様になっていた。

彼女は一番苦しかった3～4歳の冬の夜の事を何時しか思い出していた。

その当時、暖と言えれば小さな火鉢が一個有るだけだった。

(・・・あの日はいつにない雪と寒さで夜中に目が覚めた・・・粗末な壁の境目から吹雪が吹込んで薄い藁の布団が白く染まった・・・私は涙目で寒いと哀願したものだ・・・母は、済まない済まないと私を抱くと言葉に詰まった・・・でも2年前からは、着る物食べ物に不自由しなくなった・・・母の揃える着物も高価なものが随分揃った。それに、今年の節分祭からは小さな茶屋を開いたし・・・)

二年前の祇園祭の宵山の時、彼女の母が言ったことを次に思い出していた。

(八坂神社そばで田楽舞披露を毎年行っているが、舞踏が終わったら六波羅の北門催事口に来るようにと平氏の使者に言われたのだ・・・何かと思ったら、神事舞の一団にお前を加えたいとか・・・

京都は祭りや神事の多い都だからね、ざっと数えても30以上有る。)

昨年夏のあの事が有ってから、生活も良くなり母親も随分と快活になった。

、かなり生活は楽になった様に思う。

あの時から、母は月に1～2度六波羅まで出かけていった。

催事に行く前には、必ず鏡台の前に向かっていた。

鉛白を2度塗りし真っ赤に唇を染め入念に化粧していた。

そして母は、平氏の舞子一員に加えられた時から突然、読み書きの学びを始めた。

新たな今様の歌詞を歌う際に、書に書かれたれた歌詞を読めぬ者は全てを耳で聞いて覚えねばならないし、六波羅で肩身の狭い思いをしたくない思いもあった。家に帰っての復習も生活の雑事に追われままならないという事はあったが学びを続けていた。

六波羅から頂戴してきた筆、硯、和紙を秋貴にも与え、習得を強く秋貴にも勧めた。

二人は、墨の擦り方もよく判らず、まさに一からの学びであった。

当時ガラスの鏡は無く青銅を磨いた鏡面だった。

お祭りの日などは、唇を真っ赤な紅に染めて出て行った。

母は、雨の日や大風の日以外は、早朝に家を出て京の町の方へ出かけて行き、大体日が暮れる頃帰って来たが、お祭りの期間や六波羅へ行く時は、その日に戻らないことがあった。

母親は、踊りと歌で生きているんだなと初めて認識した3歳の時、初めて母の踊りを真似した事があった。

思ったより上手く踊れたのか、母は驚くやら喜ぶやら、内心えらく

嬉しかった事を覚えている。

母が戻らない夜は、心細い心を慰めるため鏡台の前に正座し、灯明台を側に持ってきて、段々女らしくなる自分の顔を飽きもせず眺めたり、ゆっくり髪を梳かしたりした。

そして、少女には似付かぬ体験をした事実のあれこれを、ゆらゆら揺れる蠟燭の炎の中で思い出した…。

( 無意識の中で覚えたのだろうか…4～5歳の頃には歌舞を練る母の真似をいつもするようになった…いつの間に諳んじたのかえと母は驚きながらも嬉しそうだった…)

「…春の弥生の曙に…四方の眺めを見渡せば、花盛りかも白雲の…かからぬ峰こそなかりけり…」

彼女はいつの間にか、人生で最初に覚えた今様を唱えていた…。

灯明の油が切れかかり芯がじりじりと音を立てた時、はっと気付いて我に返る事もあった。

それから虫の音・須磨と基本的な演目をいつの間にか覚えた。

6歳に成った頃如何しても我慢が出来なくなり、一緒に京の街に連れて行ってと駄々を捏ねたものだった。

二里以上歩かねば行けないから止めた方が良いと言われたが、如

何してもと言って連れて行って貰った。

秋貴にとって二里の道のりは辛かったが、下鴨神社が望める場所で親子が歌舞を披露し始めると、親子の組み合わせが珍しいのか、母が今まで体験したことがない様な数の見物人が集まった。

武人や公家の婦女らしき人々の顔も見えた。

地面に置かれた心付け箱を持ち上げた時の重みは、黄金を持ち上げた重みに匹敵する心地よいものだった。

その暫く後、京の街に下った時の状況は、全く異なったものとなった。

それは、祇園に向かって歩きながら主立った家々を一軒一軒回るといふものだった。京迄行く10kmの道も辛いのに、その後の一日中の徒歩巡りと演舞は小さい子には辛すぎた。

六波羅の近くまで来ると、ぐるりと囲まれた壁の向こうに立派な家々の屋根が散見され、別の世界に住まわれる人々がいるのだなという郷愁と諦めの感情が湧き起ったりした。

「京のよすがをお伝えしたく参りました。どうか舞を一献ご覧下さい・・・」と言うのが母の決まり文句であった。

しかし大概は門前払いをくらい、演舞の披露が出来なかった。



10軒に一二軒、舞を許された時には、秋貴も母に遅れをとるまいと一生懸命に演じた。親子の共演を褒めたてる家もあったが、こんなお子に旅芸人をさせるとは何事かとか、京のよすがを伝えていない田舎踊りだとか言われ早々に立ち去らねば成らぬ事も多かった。

その上、彼女は母が見せたくない人々の事も知ることになった。

大社の前を何力所か通ったが、その付近に市女笠で顔を隠し、けばけばしい衣装をした遊女達が目に入った。

母は目配せで足早に彼らの前を通り過ぎるよう促した…。

彼女らが何の目的で立っているのか？秋貴も直感的に判った。

彼女らの多くは、宮廷采女と神采女のなれの果てが多かった。

宮廷采女とは、天皇の御けを整えるため 13 歳以上 30 歳以下の容姿端麗で処女の女性を地方の豪族から献上させたもので、神采女とは、大社が宮廷采女の制度をまねて大百姓の娘を神の名で召し上げたもので、やはり美貌で処女である事が条件であった。

彼女らは、扶持米を賜り侍女を従え当時恵まれた生活を送っていた。しかし年齢と共に容貌は衰え、行政改革や社会情勢が不穏になると、真っ先に整理の対象となっていた。

故郷に帰るようにと言われ急に解任されても、生家の代が既に代ったり潰れていたり、贅沢に慣れ教養らしき物が身についた身となっていたので、草深い田舎で暮らすとか農業を継ぐ者は殆どいなかった。まして、農家の息子の嫁に成ろうという気を起こす元采女はいなかった。

そうすると、女の独り身で都か大社のある町中で暮らさねばならなかった。

自力で生活の糧を得ようにも、長い間の宮廷生活や大社内の生活で、一般社会で生き抜く生活力も覚束なくなっていた。

こうして、幾らか衰えたとは言え美貌を売り物に生きてゆく遊女が奈良時代の終り頃から既に生まれていたのである。

秋貴はこういう体験をし、辛い放浪の芸事にも付き合いながら成長して行った。

毎年、10月22日の鞍馬の火祭り日の日だけは、母は北の鞍馬の寺へ出かけていった。神事舞と天狗舞を披露する為であった。

当時女人禁制であったが、神事舞の時だけは特別に許されていた。

鞍馬寺は毘沙門天を祭る他に、神世の昔から陰陽道修験道の聖地としても知られていた。

そして、牛若丸が修行を積んで烏天狗から秘技を授かっている等という噂は周知の事実だった。

鞍馬寺は、仁王門から山門、由岐神社、東光坊、そして頂上の鞍馬寺に行き着く迄きつい上りの細道が続き、母は秋貴が6歳当時、一緒に行くことを母は認めなかった。

秋貴は、昨年やっと鞍馬祭りに行くことが許されたのだった。

その日母は早めに鞍馬に出かけ、秋貴一人で鞍馬に向かい歩いて行った。近づくと辺りは既に薄暗くなり、逢魔が時の様相を見せ始めていた。

入り口に到達する少し前、突然、鞍馬の山から小さな灯りが幾つか点った。そして数本の大松明に照らし出された仁王門前の広場に到達し、頂上の方を眺めた。。

普段閑散としている山門の手前の広場には、多くの武人、公家、山伏などが集まっていた。

老檜杉の高木や松や桜の木々に隠され、山の大松明の姿は見えないが、上方の異常な明るさは、確かに多くの松明が隠されている事を示していた。

そして、山の上の方の大松明の灯りが点されると、由岐神社と鞍馬

寺へのつづら折りの細道を皆ぞろぞろと上り始めた。

秋貴もその後を上り始めた…。

普段闇に包まれる山道も、今夜ばかりは処々にある大松明の明るさで確実に昇ることが出来た。

松明に照らし出された由岐神社の前庭に彼女が到達した時、母らの神事舞は既に始まっていた。

狭い前庭での舞は何時になく踊り手と観客との距離が近く、舞手の息づかいが聞こえるようであった。舞の中で、踊り子が松明に近付いた時、各の舞子の顔がくっきりと映し出され、何時にない秀麗さを醸し出していた。

鞍馬の母の舞を観た時、母の事を誇らしく感じた。

鞍馬の祭りはそう多くはない楽しい思い出の一つだった。

母が、今年の春先に茶店を開いたのには訳があった。

京都の鞍馬山地帯は片田舎であるが、修行のための修験道者や毘沙門天に先勝祈願する武士らが意外と多かった。彼らは必ず秋貴の家の前を通り過ぎていた訳である。

秋貴が小さい頃一人で家の前で遊んでいると、

「女子一人だと天狗にさらわれるぞ！」とか「牛若と丈は同じくらい

じゃの・・・」とか言われたものだった。

母も、時たま家の前で歌舞の練習をしていると、

「おうおう、いつ見ても美しいのう・・・」とか「祇王の代りは仏御前で無くそなたでも良いのではないか・・・」等々

冷やかしかも本音とも判らない戯れ言を言われていたものだ。

原則女人禁制の鞍馬地域にあって、彼女らは男衆にある種の清涼さを与えていた。

秋貴が生まれて10歳になる頃には、麓の白拍子の住む家を知らぬ修験者はいなかった。当時、山への行き帰りの時に一服したい者や身繕いを整えたい者が少なからず居た。

そんな状況の中で、母は開店を誰かに請われ店を開いたに違いないと思った。

春に店を開いて2～3日もすると、小さい頃から見知っていた山武士が入ってきた。

午前中の給仕を手伝っていた秋貴は、嬉々として迎えた。

「母のお店の中でお目にかかれるなんて・・・嬉しい・・・」

「何々、こちらこそ一服出来る場所が出来て有り難いぞ。それにしても、そなたも段々女らしゅう成ったな・・・」

等々言われ、他のお客達にも明るく接待するので皆に可愛がられ、美人の母と二人の茶屋は繁盛した。

店を訪れる修験道者や武人にとって、愛想が良く可愛い秋貴には心が緩むのか、有ること無いこと喋ることがあった。

秋貴にとっても、話が面白いので調子に乗って、それから？如何して？等と話の先をせがむのであった。

秋貴を一番可愛がってくれる山武士の話では、

「清盛の女好きと田楽好きは大変なものだ！いい女が町中に居ないか使者に街中を探らせているそうだ・・祇王が飽きたら次は仏御前という訳か・・・」

秋貴は時の最高権力者を呼び捨てにする事に違和感を覚えた。

秋貴は、このお方は源氏方のお方なのだろうかと内心思った。

当時源氏は、平氏の下で使われる立場と成っていた。しかし、内心は、何時かは立ち上がってやろうと耐えていたのである。

鞍馬山に足繁く通う山武士の中には、修験者や僧侶を装って牛若丸と関係を持つ者達がいたのである。

別の修験者が言うには、

「牛若丸様は、烏天狗に飛揚の術を授かったと聞いた。今、僧正ガ谷

で大木の枝から枝へ飛び渡っているそうなの。」

この時10歳だった秋貴にとって、比較的平和と言える時がこれから5年程続く事に成ったが、この頃は平氏の権勢も頂点にむかう時期であった。

翌1171年、清盛の娘徳子が15歳で11歳の高倉天皇と結婚し、平家の権勢は頂点を極めていた。

それから3年の年月が過ぎ、秋貴がいつもの様に茶屋で接待をしていると、5歳位のお子連れを連れた武人が入ってきた。

「お子連れでのご参詣で御座いますか？」

「なあに、終えて下りの途中よ・・・上賀茂の鳥相撲の先勝祈願よ。」

「鳥相撲とは、何で御座いますか？・・・」

「9月の重陽の節句に上賀茂神社で氏子の児童の相撲があるのだ・・・」

「そっちの先勝で御座いましたか、知りませんでした。」

「今の時代はお武家様も平穏で御座いますな。」

「うーむ、そうであってくれば良いが・・・私は武芸より今様を吟じたり敦盛様の笛を聞いている方がよっぽど良いわ。あのお方は息子と同年であるが、とにかく歌や笛のお上手な方での・・・」

「?..あの経盛様のお子の...敦盛様ですか？」

今の彼女にとって、清盛の孫敦盛様とは天上の人であった。

この武人にあれこれ話を聞いてみると、主に平家の経盛様の警護を担当する馬回り組である事が判った。

「お武家様は歌や笛がお好きなので御座いますでしょうか？」

「非常に好いておる。今様を吟じることもある...」

「それは嬉しゅう御座います。私と母は一通りの歌舞は何とか身に付けております。」

ここで秋貴は、今様の踊りの振りと歌の出だしを演じて見せた。

「！これは驚いた。...それにしても、眉目秀麗の女子よそなたは..お子の敦盛様にお見せしたいくらいじゃ。」

「?!まさか、その様な恐れ多いこと..とてもとても私など...」

冗談と思われるこの様な話が出る事自他、彼女には喜びだった。

そして、六波羅の平家の住まう場所には邸宅や従者の宿舎が5万軒くらい建ち並びそれはそれは繁栄を極めているとか、相国様は頻繁に街から白拍子を呼んでいるとか面白い話をして、六波羅へ下って行った。

その後、3ヶ月ほどは何事も無く過ぎた..。



何時ものように明るい給仕で客をさばいていると、馬の蹄の音が聞こえてきた…。

(飛脚馬でも通るのであろうか?…)

ひずめの音は通り過ぎては行かず、茶屋の前で止まった。

当時馬は重要な交通手段であったが、現在の鞍馬線の市原駅に当たる地帯を過ぎた辺りから道は特に狭くなり、鞍馬山への入り口の仁王門まで馬で行くことは不可能では無かったが、普通は、市原辺りで降りて、徒歩で鞍馬まで向かうのが普通であった。

(急ぎの誰かであろうか?…)

はたして、あの武人が壺装束のやや年齢のゆく女官を連れて店に入ってきた。

「まあ、またお越し頂けるなんて嬉しゅう御座います。」

「相変わらず繁盛しておるのう、実は今日来たのは、お前に話しがあつてのう…仏御前にも劣らぬ舞を先だつて観て、これは相国様にお話申し上げようかと思つたが、何しろあの様に気変わりが激しい方でのう…それはともかく、先日、経盛様のお屋敷のお半人(家事担当の下女)が2人ばかり辞めたので、そなたがもし良ければ如何かと思つてな…何かの折、家に帰る事も出来るし…」

雑仕人を求めるのなら、一人でいらして構わないのに、如何して2人で来たのかと一瞬思ったが、彼女は既にそう言った状況を理解できる年齢に成っていた。

一瞬、色々な考えが頭をよぎった。。

(..私の品定めをさせるという事か...本当に半人の仕事だけなのかどうか?..)

「お半人とはいえ、女官やお半人達の住まう宿舎は用意されている...で、如何かな？」

「はあ..しかし、余りに突然の事で...如何して良いやら...母君と相談し後ほどご返事申し上げてよろしいでしょうか？」

「うむ、構わぬ。4~5日したら又来るでな...そうそうこの笹茶は旨いでな、頂いてゆこう..」

(祇王も路上演舞人から更衣にまで成ったのだし、母も平氏お抱えの舞子の一人に成ったし、私にも何か起れば良いなと思わぬ事も無かったが...)

この様子を母は簾の向こうからじっと見ていた。

秋貴は、簾の向こうの母に視線を移した。。

母は言った。

「良いお話しではないか…平氏で無ければ人にあらずの時代に平氏の館に住まわせて貰えるなんて、観世音菩薩のお陰だよ…

実は、折りをみて鞍馬寺へお参りに行っていたんだよ…行ってお仕えになりなさい…」

「でも…お店や街で行う踊りの披露は…母君一人では…母上も一緒に行ってくれるなら良いですが…」

「私はもう 30 だよ、街での踊りも今年限りかと思っていたのさ、店は幸い繁盛しているし、元々私は一人でやって来たから大丈夫さ、心配しないでお仕えしなさい。」

こう言われて、秋貴は黙ってしまった。

考えてみれば、母の事は何も知らなかった。

何処で生まれたのか？どうして白拍子に成ったのか？家を建てる

お金はどの様に工面したのか？そして、秋貴の父親は誰なのか？

恐らくこうであろうああであろうと考える事はあった。

そこから推測される結論は、決して好ましいものでは無かった。

その為、そうであればあるほど益々母に問い合わせることは出来なくなっていた。

兎に角母は、女が生きて行く為のコツを自然と叩き込んでくれた。

秋貴が六波羅行きをいよいよ決心しかかった時、こんな事を話してくれた。

「衣装は基本的に派手な物を着るように。ただし、嫌みな派手さは良くない…何所か上品さを感じる衣装にせねば…読み書きの勉強は続けるように…化粧も鉛白は二度塗りし口紅も濃い赤に塗るように…」等々。

秋貴は8歳から筆を持っていたので、7年間の学習で優しい歌詞は何とか読み書き出来るようになっていた。

何となく続けてきた事であったが、娘が何処かに仕えた時に役立つ様にといい親心だったのだと思うと胸が熱くなった。

母が過酷な現実を生き抜いて今日まで来たという事実だけは年齢と共に強く認識する様になった。

5日後に使者がやって来て彼女の承諾の意思を確認すると、その数日後、以前来た女官が下人一人を連れてやって来た。

母との別れは、暗いものではなかった。

多少不安も有ったが、新しい門出に期待と希望を抱いて家を下った。下人は、彼女の身の回りの物を入れた2個の手箱を繋ぎ肩に担いだ。

街へ下る途中に、年配の女官はこんな事を言った。

「秋貴様の主な仕事は水仕事と掃除です。歌舞が特別に優れているともお聞きしております。私も一度拝見したく思います…

仏御前の件が有ってからお抱えの白拍子達は、一見の芸人の来訪を非常に嫌うようになりました…せめて、花見や月見の余興でもお呼びが掛るようになれば良いですが…」

秋貴には話の意味する事がよく分からなかった。

今の秋貴の心の中は、雲の上の人々の館の中はどの様な感じなのかとか、貴族の生活ぶりはどうか、月を眺めての歌と箏笛の世界はさぞかし優雅であろうとか、すっかり夢見る乙女の心持ちで軽やかに歩を進めていたのである。

そして、女房殿にご挨拶する事になったのだと言って、その時の挨拶の仕方手順等を念を押して話して聞かせた。

## 2, 六 波 羅

……秋貴は、とうとう憧れの邸宅の敷地の前までやって来た…。  
最高権力者清盛の弟の邸宅らしく、大きな屋根門の両側を頑丈な  
厚い塀が囲み、周りには濠に見立てた門川を廻らしてあった。

屋根門の両側には、仲間長屋まである。門から奥まで遠く御影石  
の石畳が続いている…。

付き添いの女官に続いて門を潜ると、広大な躑躅と梅・松の庭園  
が広がった。泉水もあり木々の枝もよく選定されており、松や梅  
の形も風雅な曲線を見せていた。

女官が言うには、敷地が 1500 坪、周りにある従者の館とお半人  
の居宅を除いても建坪が 300 坪あるという。

秋貴が周りの様子に見とれていると、あの女官がこう言った。

「命婦(五位以上の女官)より下の者の着任挨拶は普通行われませ  
んが、女房(皇后・中宮付女官)にお目通しするようにと仰せつかつ  
ております。先程お話しした手順等間違えない様に頼みますよ。」

何で私が挨拶をするのだろうかと彼女は思ったが、それにはあの  
武人の思惑があった。

広い玄関に入り草履を脱ぐと、側付の下男が直ぐにそれを右側にある所定の場所に納めた。

女官は、出迎えた若い女官に何事か耳打ちした。

重厚な衝立の向こうに歩いて行くと、左右と真正面に廊下が続いており、正面廊下の突き当たりに部屋があった。

女官は正面の廊下を真っ直ぐ突き当たりまで進むと、直ぐに正座し、徐ろに襖を開いた…。

彼女に招き入れられた秋貴は、先程聞いた手順方法を間違えまいと必死になって頭の中で反芻した。

入り口で正座しお辞儀をし、静かに中に入り襖を閉めたらやや側まで徐ろに行き、そこで正座して深く頭を下げたまま、

「鞍馬から参りました秋貴と申します。この度はお半人の一人としてお召しに預かり有り難う御座います…」等々。

言われた通りの口上を何とか述べると、「面を上げなさい…」と言われ、恐る恐る頭を上げた。

小桂姿の女房はこう言った。

「よう参った…雑仕や水仕の仕事とは言え、平氏を支える大事なお仕事、しっかりお勤め下さるようお願いしますよ。それと、歌と

踊りが特別優れていると聞いたが・・成る程、今日の袴と小袖の色合いが絶妙ではないか……」

そこからどの様に返答しその場から下がったのか、緊張と興奮で記憶が曖昧となった。

本殿の左側にある雑人の宿舎までは、建物と建物が渡り廊下で繋がっていた。本殿の左側の廊下を過ぎ、渡り廊下を歩き始めた頃、秋貴はやっと心が落ち着き始めた。

こうして秋貴の 5 年間に及ぶ六波羅生活は始まった。

翌日からの彼女の主な仕事は、炊事が主であったが、年配のお半人が体調を崩した時など着物類の洗濯や掃除を自ら引き受けて喜ばれた。

鞍馬の家での厳しい生活を耐えてきた彼女にしてみれば、ここでの雑事など如何という事は無かった。食事は、上級武士や女官達の食材の残りを適当に調理し賄うものだったが、それでも実家での食事より上等なものであった。

お半人達の部屋は、男子部屋と女子部屋に分かれていた。

女水仕人の女子の部屋には、秋貴より年上の娘達が他に 3 人いた。そして一月も経たぬうちに家族の様な関係になった。



仕事が終わる夜になると、暗い燈明の下で、未婚の娘らしい会話が為された。

先輩お半人達の話は色々興味深かった。

「ここへ来て驚いたのは、内侍さま以上の位の方々は、厠に行くときでさえ単衣を一枚羽織って行くのさ…普段でも日に3回以上着替えるのが普通だそう…」

別の娘の話は、

「貴族の女子達は、なるべく顔を隠して男衆に観られないようにするそう…喋るときは上品な小さな声でしゃべり、笑うときは扇子でいちいち顔を隠すとか…」

「…それと、方違えとか言うのがあって、行きたい場所に直ぐ行けない事が多いそう…一端吉方位に行って、そこから目的の場所に行かねば駄目とか…」

更に別の娘達が言うには、

「言いたいことも普通に喋れないそうよ、歌で伝えて歌で返さなければ、風流でないそう…」

「お武家さま達も、今までみたいに武芸だけに励んでいれば言いという時代でないみたい…歌や今様…笛・鼓とか出来ないと田舎

侍と言われるそうよ・・・」等々。

女官様やお武家も意外と大変な職らしいという話題はよく出る話だった。

「秋貴、白拍子だったそうね、ちょっと踊りをみせてたもれ。」

と言われ、今様を披露することもあった。大概は簡単な田楽の披露だったが、気分が乗った時には、

「春の始めのうたまくらあー・・・かすみたなびく吉野山・・・」

自分の持ち歌の中でも難易度の高い今様を披露する事もあった。

少女達は息を詰めて見とれた。襖が少し開き、隣の部屋の男お半人が覗いて、

「これは、むせ返るような女護が島ですな・・・」

等と冷やかされる事があった。

それから、「踊りも歌も素敵！あこがれるわ・・・」

「私も白拍子になって誰かに見初められないかしら・・・」等

彼女らは言い合い、漂泊の恋愛劇の世界に入り込んでいった。

こんな時秋貴は思った。

（皆喜んでくれて嬉しいわ・・・でも、ここに来て1年経ったけれど、

位の高い方からのお呼びは無いわ・・・高倉天皇が小督の局を見

初めたみたいに私も位の高い方に見初められないかしら・・・身分の低いお半人ではやはり無理かしら・・・)

そんなある日、女水仕人の一人が病で寝込んだので、秋貴は従者宿舎の裏手にある井戸に水を汲みに行った。

日は嵐山の方に半分沈み、秋の夕焼けの光りが遠くの寺社や武家屋敷をきらきらと輝かせていた。

両手に水桶を持って井戸まで行き、音も軽やかに釣瓶を引き水を入れていると、自然と今様の「秋の白露」の一節が口から流れ出した・・・。

季節情景に合わせて田楽今様を演じるという事は、流し白拍子の仕事を手伝った中で自然と身に付いていた。

この歌声は、小さいながらも西側本宅廊下に響いていた・・・。

長い廊下を歩き自室に戻ろうとしていた平敦盛とお付きの者らは、普段聞こえるはずの無い場所から聞こえてくる綺麗な歌声に聞き耳を立てた。

「敦盛様、この様な場所から歌声が聞こえてくるとは奇妙で御座いますな・・・相国様お付きの白拍子達がこの様な所で歌う筈もありませんし・・・」

「・・・水仕人の女子であろうか・・・下人の中に元白拍子がいるとは聞いていたが、その者であろうか？歌がこれ程なら舞も優雅であろうな・・・」

「これ程の歌を聞くのは仏御前の歌以来で御座いますな。」

「明後日の歌会は月見会だ、その時迄に探し出して南西の縁側に連れて来てはくれぬか？・・・」

この時、敦盛はまだ 7 歳、秋貴は 16 歳だった。

敦盛は芸術の才能があり、祖父が鳥羽上皇から賜った「青葉」という名笛を 4 歳から吹いていた。

彼の日課は、午前は主に武芸の訓練であった。士族の生まれである以上、武芸が嫌いとは口が裂けても言えなかったが、彼の愛するものは芸能であった。

彼は、7 歳の頃には今様と田楽の主な曲を習得していた。

翌日、明日の夜に庭の南西に来るようにとのお呼びが秋貴にあった。当時白拍子が舞を披露する場合、男性の衣服で舞うのが一般であった。

彼女は慌てて 1 年ぶりに手箱の中を探った。

狩衣と直衣があるのを確認すると少しほっとした。

狩衣に袖を通してみると少し窮屈になっていたが、兎に角、明日これを着て時の権力者の孫に拝謁するのかと思うと、身震いする思いであった。

当夜庭に行くと、満月が広い庭を浮かび上がらせていた。。

額が地面に着かんばかりに深くお辞儀していた彼女が、徐ろに顔を上げると、襖が全て開かれた奥の和室には、管弦の服装をした少年が正座していた。

左右奥には女官が控え、廊下右手に鼓の男子がいた。

（！..私よりずーと若いではないか..）

（彼がこれ程年端も行かぬ少年だとは意外だった。

「一昨日詠っていたのは、「秋の白露」ではないか？」

「！..はい、そうで御座います。誠にお恥ずかしい限りで御座います。」

「なんの、流麗な歌であったぞ..下人の中に、これ程風流な女子がいるとは驚きであった..私は歌は少々たしなみ舞は学んでおらぬ、笛のみでな.. 今様は歌と舞が大事の芸事、そなたの歌舞と私の笛、六郎太の鼓が揃えば、宮廷の歌会に呼ばれても安心であろう..」

こうして彼女は、敦盛に請われるまま、今様の梁塵秘抄を演じ始めとし何曲かを一生懸命に演じた。

演じながら心の中には、寒気吹込む家での練習の数々、どさ回りで受けた軽蔑など辛い体験が浮かんで消え、晴れ舞台で演技できる幸せを深く噛みしめるのであった。

こうして、夢のような日々が始まった……。

秋貴は週に一～二度歌会に参加し、金粉を塗した扇子を頂いたり、金子を頂いたりしてそのうち、生い立ちや鞍馬の祭りの様子等も問われるようになった。

1年過ぎて1177年、嵯峨野から連れ戻されていた小督の局が範子内親王を生んだという噂が話題となった。

その噂が覚めやらぬ頃、秋貴はある歌会の終わりに敦盛からこんな事を言われた。

「秋貴殿、いか様な笛の音にも合わせる舞と歌の素晴らしさ…その姿形の美しさ…この陶酔を命の限り続けようではないか…今のままでは何かと不都合、内侍になって仕えてはくれぬか？」

「…女官の内侍で御座いますか？」

「私は、女房(貴族の直属の使用人)で仕えて貰いたい、祖父や

父上の目が厳しくてな…内侍で暫くは仕えてくれ。」

「勿体ないお言葉！私のような身分の卑しい女が内侍など仰せつかっていいもので御座いましょうか？……」

「そなたの芸の高さと優美な姿は既にこの屋敷全ての者達の知る  
ところだ…気兼ね無用であるぞ…あす女官頭の所に行って所作  
や新たな住まいなど聞くが良い…」

(…この今の気持ちはどう表したら良いものか…あの明日の食べ物もどうなるか分からない過酷な日々からここ迄私は来たのだ…  
鞍馬に飛んで帰って、母と抱き合っただけの涙を流したい。)

こうして内侍としての新たな生活が始まった…。

秋貴は住居を本宅に移し、奥の女官部屋に住むことと成った。

仕事内容もがらりと変り、食膳やお酒の給仕、神事・歌会の場調整、  
来訪者の取り次ぎ等直接上級武士に会う機会が多くなった。

そこでの楽しみはやはり、歌会での敦盛との掛け合いであった。

当時、清盛の弟薩摩の守・平忠度は歌を五条の館で三位俊成から  
学んでいた。彼は文武両道に優れ、重盛と彼は平家の中で人格者  
としても知られていた。

敦盛の歌会の評判を聞いてか、彼はちらほらと歌会に顔を出すよ

うに成った。最初の頃歌の掛け合いだったものが、忠度の短歌に敦盛が笛で伴奏をし、秋貴は即興で舞を舞う事もあった。

逆に忠度の館へ出かけて行き、そちらで歌と笛演舞を合せたり、二人が今様や短歌について篤く語る光景を頼もしく眺める事もあったりした。この様な時、秋貴は特に幸せを感じた。

そして重盛の三男清経も時折笛を持参して会に加わる事もあった。

武人でありながらこうも奥ゆかしい人びとに囲まれて時を過ごせるという状況が、現実なのだとは信じられない位だった。

この頃平家の勢力は頂点に達しており、この優雅な時が何時までも続くであろう続いて欲しいと六波羅の人々は思っていた。

しかし、朝廷の権力を左右する様に成った平氏を疎ましく思う輩の策動が動き始めていた。

この年、鹿ヶ谷の山荘では平家倒滅の密議が行われ、多田行綱の密告により謀反は未然に終わったが、早くも平氏打倒を狙う輩が動き始めた事と、黒幕に後白河法皇が絡んでいた事実は六波羅の人々に驚きと不安を与えた。

更に皆が驚いたのは、相国清盛が関係者を斬首や島流しにした事と、帝を鳥羽の北殿に幽閉しようとし長男の重盛が 1 万の兵を集



めて清盛を諫めた事だった。この時、首謀者の一人で喜界島に流された俊寛僧都の妻と若君・姫はあの鞍馬に避難した。

この事件の後、目代(国司の代理人)に統治を任せていた薩摩の守・平忠度は、薩摩の情勢確認のため薩摩に下って行った。

これら一連の出来事に敦盛様は心を痛めている様子に感じられた。敦盛様は心優しいお方、到底武人には向かないお人だと秋貴は感じた。

秋貴の脳裏に一抹の不安がよぎったが、暫く経つと六波羅は以前の様な平安な日々に戻っていた。

正月には久方ぶりに鞍馬の実家に戻り母と再会する事が出来た。ひしと抱き合い涙を流す二人であったが、お互い感ずるところは同じであり、言葉を発せず目を見つめ合うだけで全てが判るのであった。そして母と四方山話に花を咲かせているうち、初夏の頃に鞍馬に籠った僧都の若と妻が、相次いで病で亡くなったのだと母から聞かされた。

鞍馬の自然は厳しいし心労が重なって亡くなったのだろうと思うと同情の念を禁じ得ないが、秋貴の力では如何する事も叶わなかつた。とにかく平穏な時を3日過ごして秋貴は六波羅に戻った。

正月過ぎには、建礼門院の懐妊が判り六波羅は久方ぶりに喜びに沸いた。

その後、秋貴と敦盛様の今様は益々さえを見せ、初冬に予定された建礼門院の出産に向けての祝儀歌舞の練習にも熱が入った。

そして11月には、建礼門院は待望の皇子を生んだ。

清盛宅の大広間での祝会は盛大なものとなった。。

正面に清盛と建礼門院、高倉天皇、両脇には位の順に武官高官が並び、無冠太夫の敦盛はやや後ろの席となった。

当日秋貴は、会場の設営から始まり、食事や酒の提供、酌婦としての勤め等忙しく動き回った。

場が一段落した頃に、舞を一献という事に成り、別室で着替えて団体演舞を披露し、300人余りの武士から喝采を浴びた。

その後敦盛らの笛鼓と秋貴の歌舞が披露されると、会場から驚嘆の声が挙った。

「何と優美な舞よ！..何方の白拍子かな..」

「笛も舞もわび寂びを感じるのう...」

この時敦盛に、女好きな清盛様が秋貴に一目惚れするのではな

いかという思いが一瞬浮かんだが、ここは孫の誕生の席、さすがにその様な心配事は起きなかった。

この行事が終わり、年が明け六波羅は又以前の様な平穏な日々が続き始めた。

清盛入道は、貿易港を開かんとして福原に居を移していた。

7月に娘の盛子が亡くなり、8月には朝廷との調整役であった人格者の重盛経が亡くなり、福原には不穏な空気が流れ始めた。

後白河法皇と清盛の確執はとうとう一線を越え始めた・・・。

六波羅に戻った清盛はクーデターを起こし、法皇は法住寺殿に幽閉された。

ここに至り敦盛様や秋貴の不安は強まっていたが、1180年2月に皇太子が即位し安徳天皇となったので、これで朝敵になる事態は避けられるとの安堵感が六波羅に漂った。

しかしこの年の春に以仁親王が平家倒滅の令旨を発布してから、歌舞を演じる機会は殆ど無くなってきた。

6月には急遽福原へ遷都する事になり、てんやわんやの忙しさの中で神戸の福原へ居を移した。落ち着く暇も無く、8月には頼朝挙兵の報が入り、10月には木曾の義仲挙兵、富士川での

敗退、12月には、再び六波羅へ居を移した。

落ち着くまもなく奈良の都の焼き討ちが起り年を越した。

まさに息つく暇も無い事件の連続・・・それも悪い事件の連続であった。

秋貴は思った。

(一体、どうした事であろうか？この栄華と平安は未長く続くはずだったのに・・・いや、又必ず元に戻るに違いない。)

しかし、1月には朝廷と平氏の調整役であった高倉天皇が崩御し、2月4日に平清盛が原因不明の熱病で亡くなり、秋貴は不穏な将来を感じ始めた・・・。

あに凶らんや木曾周辺では義仲が平氏方の越後軍を破り、その勢力をどんどん広げていた。

東国では、源氏が平氏を打つべく体制を整えていた。

ここで平家側が何らかの手を打っておけばその将来は変わっていたかも知れないが、平氏の指導層にその危機感は不足していた。

翌82年は、日照り続きで大飢饉の年と成ったが、六波羅にとっては嵐の前の平穏と言うべき年であった。

京都の神泉苑で弘法大師が雨乞いの祈禱を修されて以来、日照りの年には帝らが臨席の上高僧らの読経と 100 人の白拍子による舞を披露するという神事が挙行されていた。

影から危機が迫っていたにも拘わらず、7 月にこの雨乞い神事が挙行される事となった。

経盛配下の女官の中からは、敦盛の強い推薦もあり秋貴一人が 100 人の女官の一人に選ばれた。

選ばれた時は 7 月の神事の 1 ヶ月前だった。秋貴は母から雨乞いの歌の教授はなされてはいなかったが、古典の招雨の踊りを必死に覚えて、その日に備えた。

その日は、一生の晴れ舞台に相応しい日だった。

神泉苑の池からは、龍頭船に乗った雅楽の伶人達の優雅な音楽が聞こえ、正面には、後白河法皇、建礼門院と安徳天皇、平氏や貴族の公卿達が控えて、高僧のお経に効験有るかどうかそれとも、白拍子らの歌舞に効験有りや無しやと歓心を高めていた。

最初に高僧ら 100 人による仁王経が講じられたが、効験なく、次に美しい白拍子達が次々と団体や個人の舞を披露してゆき、後半に、秋貴ら六波羅の白拍子達は団体演舞を披露した。

その後も舞は続き、99人舞い終ったが空は晴天のままだった。  
最後に水干に立烏帽子姿の静御前が舞うと、竜神の気に入った  
のだろうか愛宕の山の方から黒雲が俄に広がってきて、洛中を  
覆い始めた……。辺りは薄暗くなって稲妻と落雷の音が響き、  
大粒の雨が降り始めた……。

皆が諦めかけていた時の思いがけない雨だった……。

望みの雨に法皇も喜んで、静御前を褒めそやした。

帰宅の足取りは皆軽やかだった。

牛車に入れない者や雨具を持参しない者は、ずぶ濡れ状態で帰  
宅する事となったが、静御前の話題や高僧の読経より白拍子の  
舞を八代竜王は好いておられる等々、楽しい話題を交しながら  
の帰宅であった。

この雨は3日3晩続き、京都地方にとって恵みの雨となった。

京の都は又活気を取り戻し、秋貴はこれからの自分を思った。

(自分の希望が叶えられて行く……敦盛様がもう少しお年を召さ  
れたら、側室でも召し抱えてくれるという事があるやも……

側室のお子が後を継ぐこともあるし……そうなれば昇殿を許さ  
れる身分になる……)等々夢は大きく膨らむのであった。

しかし、平氏が挙行する優雅な神事はこれが最後となった。

心ある一部の者らの心配をよそに、10 月には清盛の三男宗盛が内大臣となり、雅な行事の挙行に六波羅は精力を費やしていた。

敦盛様の歌会は以前の様な活気を何とか取り戻し、重盛の三男清経様が参加して笛の二重奏を楽しむ事もあった。

年は明け、義仲を討つべく北国に送った 10 万の兵は意に図らんや 5 月に倶利伽羅峠で大敗北を喫し、7 万余騎を失った。

とうとう心配は現実となった…。

義仲軍が 7 月には都に攻め入るとい噂が入り、京の町は大混乱に陥った。

風雲急を告げ始めた。

### 3、都落ち

六波羅では急遽建議が行われ、平家の拠点の一つ福原に逃れることとなり、慌ただしい準備が始まった。。

下男らは実家に戻る事を許されていが、女官以上の女衆は基本的に主従関係を維持する事を求められていた。

しかし秋貴は、敦盛様からこう言われた。

「秋貴殿、其方を留め置いたのはこの私だ。。故郷の鞍馬に戻り母と共に過ごすがよい。。」

既に秋貴の心中は、平家に仕える家臣の一人に成りきっていた。

「。。私は敦盛様にお仕えする身。。最後まで命運を共に致します。」

今の秋貴にとって唯一心配な事と言えば、母親のことであった。

早速一時帰郷の許しを請うと、2泊3日という短い帰郷が許され、急いで鞍馬の実家に戻った。

母親が夢に見ていた神泉苑での雨乞いの舞を、娘がなし得たことを伝えると、涙を流して喜んでくれた。

「私の夢をお前が叶えてくれてもう何も言う事はないよ。。。私のこ



とは心配しないで、しっかり敦盛様にお仕えしなさい…」

と言われ、安心して帰路につく事が出来た。

京を発つ直前に、六波羅 5 万軒に火が放たれ、その強い火は夜になっても燃えさかり、京の町を昼のように浮かび上がらせた。

秋貴は、思い出を消されていく様な辛い心持ちで京を後にした。

着いた福原は荒れ果てており、直ぐに船で北九州の太宰府に向け出立した。

威容を誇った平家も今は、僅か7000千騎での出航となった。

秋貴にとって慣れない船旅が始まった…。

やっと着いた太宰府も、直ぐに追われ、福岡の箱崎まで徒歩で向かう事となった。普段は輿か牛車に乗る女院や女官は徒歩で歩かねばならなかった。しかも天候は大雨となった…。

秋貴も同じ立場であったが、粗末な家での越冬や路上のどさ回りに耐えてきた秋貴は何とか耐える事が出来た。

秋貴は、皇后や高級な女官達の心の内を考えると真からお気の毒であると感じやるせなさが募った。

(先だって迄、六波羅の豪邸での雅な生活…神事で御所までの行き帰り牛車に乗ってゆく日々…今は、ずぶ濡れになって素足から

血を流しながらの長距離歩行…ましてや帝の生母までずぶ濡れでお歩きになるなんて余りにお気の毒…)

いつの間にか秋貴は涙を流していた。だがその涙は雨に流され、気付く者としていなかった。

既に秋貴の心は、平家の一員そのものと成っていた…。

その後定住の地が定まらず海上を彷徨ったりした。

日も暮れ掛ったある夕方、将来に絶望した清経は笛で鎮魂の曲を奏で海に身を投げた。

じわじわと彼らは追い詰められていった。

この頃から秋貴も自死を意識する様になった。

この時彼らに長門の国の知盛の助けがあり、何とか体制を立て直して居を屋島に構える事が出来た。

年が明けた 84 年 1 月に義仲が討ち取られ、次には源氏が西の平家を討つべく西に兵を進めるという報告が入り、平家は神戸の福原に陣を構えた。

まだ 15 歳の敦盛様が行かない事を秋貴は内心強く願ったが、叶わなかった。

心配顔の彼女ら女官にこう言って出立して行った…。

「元々平氏は武家集団…案ずるでない…勝って平家の再興を果たす。戻ったら再び歌会を行おうではないか。」

毎夜毘沙門天に必勝を祈願したがその甲斐もなく、義経の奇襲に遭い敗北を喫したとの報が入った…。

やがて戻った船の数は半分以下と成っており、その中に敦盛様の姿は何所にも無かった。

歌人仲間でも猛将の忠度様の姿も無かった。

敦盛様が決戦の日の夜明け、微かに波の寄せる音以外何も聞こえぬ海岸で鎮魂の曲を奏で、敵をも感動させたと言う話を聞いた。

(歌会の時に時折鎮魂歌を奏でる事があったがその曲ではないだろうか…敵味方の区別無く深く冥福を祈り、平安の世を願うような曲…平和主義者の敦盛様らしい曲…)

一ノ谷に響き渡った笛の音の旋律は、歌心有る源氏の兵士の心にも響いた。彼らは戦が終わった後にこの旋律を思い出し、或る者は、万葉集で有名な歌人の歌の中から旋律の流れに相応しい句を引用し、歌い出した…。

この一ノ谷で平家が失ったものは余りに大きすぎた。

秋貴の心の中に在った希望の光が消え失せ、抱いていた将来の夢

ががらがらと崩れていった…。

魂が抜けたような状態で屋島暮らしを続けている時、維盛様が二人の家来と共に船で何処かに消え去るという騒ぎがあった。

那智の海に身を沈め極楽浄土参るとの言葉を残しての冥土への旅だった。

全ての望みが消え失せた今、秋貴は、何所でどの様に死のうかと考える日々が続いた…。

この様な魂の抜けた様な心持ちの中で年は明けた。

2月に入って義経の奇襲があり、屋島からも退却する事となった。

次の向かう先は、山口県の長門だった。ここが最終到着地であるという事は誰もが感じていた。

逃避行の途中、瀬戸内の海は穏やかで、島々は梅が咲き漁師が漁をする様子が覗えた。しかしその平穏は自分にはもうやってこないのだと感じ、心をより悲しくさせた。

船縁から遠くを見詰め、今夜こそは海に身を沈めて敦盛様の後を追おうと決心した時、因島の高台にある一軒家の前から 5～6 歳の少女が手を振る姿が見えた…。

(何と無邪気な…これから皆は死なんとしているのに…何も知

らずに挨拶しているだけなのだ・・・戻れるならあの頃に戻りたい・・・)

生活は厳しかったが、何も知らず漠然と将来の何か良いことを夢見ていたあの頃に戻りたいと思った。

自死の思いを捨て切る事は出来なかったが、兎に角その夜は死ぬことを思いとどまった。

数日後、平家の面々は山口県の彦島に陣を引いた。

いよいよ源氏の水軍が近づいて来るという情報が伝えられ、平家水軍は3月23日の夜までに壇之浦の対岸に陣を移した。

生きて都に帰る事は無いだろうと私達女官らは感じていた。

武人達は、良い死に方を考えているのであろうなと思われた。

明日が最終決戦の日と思うと、物心付いてから今までの人生の出来事が走馬灯のように甦ってきた・・・。

(鞍馬の麓で一生を送るのかと思っていたら、思い掛けない事が次々と起こって、とうとう壇之浦まで遣って来た・・・随分忙しく変わる人生だった・・・明日はどんな死に方をするのだろうか?)

色々な思いが次々と浮かびよく眠れない夜を過ごした・・・。

早朝、女官らは大きな二艘の唐船に分散して乗り、船底から出な

いよう指示された。この時、安徳天皇らは別の御座船に乗ることとなった。

卯の刻、船が沖へとこぎ出され、流れに乗って白旗船団に近づいていった。そして、矢合せが行われ戦太鼓が連呼されて、いよいよ一大決戦が始まった……。

最初、平家の船々は前進の流れに乗りどんどん源氏軍団に近づいて行き、弓矢が届く距離に入った時、ビシ、ヒュウという音と共に両軍から無数の弓矢を打ち合った。船のあちこちにドシ、ドスという刺さる音が響いた。源氏軍は狡猾にも水夫や船頭を真っ先に殺す作戦をとっていた。船と船がぶつかる音がし、源氏の船に兵が乗り込んで斬り合う音や射られ斬られし海に落ちる音などがし、流れる船底の中の皆は、ただただ念仏を唱えていた。

多くの騒音の中時折、「義経！出でて我と組めや！」という教経様の声が遠くから何度か聞こえた。

(義経は逃げ回っているのか？…鞍馬で飛揚の術を身につけたのは、この為だったのか…敦盛様は正々堂々一対一の戦いに望まれたのに義経は卑怯な男…)

こんな事を秋貴は感じたが、この期に及んで女官一人の怒りなど

どうなるものではなかった。

流れに乗ってじわじわ源氏の軍勢を押している様感じた。

長い戦闘が続き、お昼近くに流れが止まり一時膠着状態になった。

西から東への流れが東から西へと変わる一瞬の間だった。

両軍の戦闘に一瞬の静寂があった。

両軍が体制を整える為に訪れた一瞬の間だった。

この時点では、どちらの軍が有利なのか船底に居る秋貴には判らなかつた。その為秋貴は、如何しても戦の場面をこの目で確かめたいと思った。

できる限りの早さで船底の階段を登り、甲板上にある御座室に入った。前方には、源平数十隻の船が入り乱れて見え、乗り手が死に絶えてただ流される船も少なからずあった。

左手 100 疔ほど遠くには、建礼門院様らの乗る御座船が見えた。

その御座船が見え少し安心したのもつかの間、流れが逆方向に流れ始めた。。

ここで体制を整えなければならぬところだが、平氏の船の多くは船頭や水夫を失っていた為、ただ流れに任せるまま漂う事になった。唐船の水夫もいつの間にか 3 人しかおらず船尾の方へ流

され始めた。

源氏の仕掛け船が左右から近づいてくるのが見え、秋貴の近くの木製の盾に矢が突き刺さった。甲板にはまだ 10 人程の武人がいたが、秋貴は慌てて船底に戻った。

そして、一心不乱に念仏を唱えていた。

上の方からは、どしっという音がし、鎧を通し射貫かれた武人がうめき声とともに海に転落した音が聞こえた。やがて源氏の兵士達が次々と侵入する音が聞こえ、残った平氏の兵達と戦闘が始まった…。刀と刀の打ち合う音や鎧に刃が当たる鈍い音、叫び声やうめき声などが暫く響いていたがやがて治った…。

自分たちが船底から引き出されるのは時間の問題だった。

最終的に、秋貴らの船は他の船と共に壇之浦のみもすそ川の河口付近に流されていった。

秋貴らは源氏の兵により甲板に引上げられた…。

左手 100 程離れた海上に、御座船とそれを囲む平氏の船が見えた。人の姿は小さかったが、何とか認識できた。

二位の尼は脇に神璽の箱を抱え、辞世の句を唱えているのか言葉を唱えながら安徳天皇の手を引き、海中に身を投じた。それを観



て、甲板上に居る女官達から咽び泣きの声が響いてきて、源氏の兵士達も息を詰めてその様子を眺めていた。

「お劳しや…」、「お気の毒に……」

等、源氏の兵からもつぶやきの声が聞こえた。

猛将教経が源氏の武者 2 人を左右に抱えて海に飛び込むと、次に大将の知盛が合掌のまま身を投じ、残された平家の武人らや女達も、ある者は念仏を唱えながらある者は悲痛な叫び声を上げながら次々と海中に身を投じた…。

秋貴の乗る唐船の甲板にはしばし慟哭の時が流れた…。

秋貴もまた自死の事を思った。

(先程甲板から身を投げるべきだった…また自分は死に損ねた。)

倒れ伏せたままむせび泣く女官、立ったまま下を向き動かなくなった兵士、秋貴は海を見詰めたまま動けなかった…。

この後秋貴らは、源氏方の命令に従い別の船に集められ、死人の様に力無い表情で次の処置を待った。

最終的には、死に損ねた高級武人 38 人と建礼門院が捉えられ、武人らは京で引き回しのうえ鎌倉に送られる事となった。

死におくれた秋貴らは門司に、建礼門院の女官達は、下関の港に

運ばれてその場で解放されることとなった。

## 4, 薩摩

話は、鹿谷の陰謀事件から二月程過ぎた 1177 年の夏に遡る。

清盛の弟平忠度は、薩摩の情勢査察の為薩摩に下った。

平穩時における国司の現地見聞は、定例の現地視察と意見交換をし、現地の目代や各地の豪族の接待を受けて帰還するのが一般であった。5 月に陰謀は有ったが、平氏の権勢は未だ未だ盤石と思われていた。

忠度は、南国の空気は如何なるものか一度味わってみようという心持ちも有っての下向であった。

ただ、京から薩摩の国までは約 1000Km もあり、徒歩なら 20 日以上、馬でも 10 日程はかかる長い道のりであった。

忠度は 30 騎程の側近を引き連れ六波羅を出立したが、瀬戸内の海と島々を左手に観ながら順調で平穩な旅を続け、下関に到着した。下関は、平安時代から繁栄を極める活気のある港であった。

下関から関門海峡を渡る船に乗った時は昼過ぎであったが、船が順風で進む早さに匹敵する流れの早さには驚かされた。船頭は、進行方向の左 45 度に舵を取りながら船を進めて行き、騒ぐ馬達

を尻目に無事門司港に到着した。

薩摩へ下る道は、肥後周りと臼杵別府日向周り、それと日田竹田高千穂と通る山道の三通りがあった。

折角の長旅であるからぐるりと九州を一周しようという事になり、行きは瀬戸内を遠望しながら日向灘を通り都城から薩摩へ行き、帰りは、肥後肥前周りの道をとって帰京すると決まった。

何時の時代もそうであるが、戦争へ行く旅や災害を逃れる旅は辛い旅であるが、平穩時の旅は長旅であっても辛いという旅ではなかった…。

途中平氏の豪族の館で宿をとりながら、日向灘を下るにつれ南国らしさと暑さが増し、都城にある島津家の氏族北郷家の館に到着した日は夕方であった。

地元の料理と焼酎で歓待され、酔いもまわって双方の気分も高まってきた頃、城主はこう言った。

「歌人として忠度様の名声は、この大隅・薩摩にまで届いております。北郷家の中でもちらほらと歌や今様を学ぶ者が出ておりますが指導者もおらず、今宵は是非ともご指導を賜りたく、なにとぞ宜しくお願い申し上げます…」

「私も三位俊成さまから学んでいる身、指導という程のものも成せるかどうか分らぬが、共に歌の掛け合いで楽しもうではないか・・・」

「実は、私の側近の息子に筋の良い者がおります。歌会への参加をお許し下さい。」

この時城主にはある思惑があった。

六波羅の平氏の武人らは歌や舞が得意な者が多いという噂は薩摩まで知れ渡っていた。歌会で下手な歌ばかりを披露すると、薩摩は田舎侍が多いと思われかねない。そこで、北郷家の家来の中で歌舞が得意な者を探したところ 15 歳の少年に白羽の矢が立った訳である。

歌会の広間に上品な感じの少年が入ってきた時、忠度は内心驚いた。。

「有島竹守と申します・・・この度は、会への参加をお許し頂き誠にありがとうございます。恥ずかしくない句を創れる様精一杯努力致します。」

忠度は思った。

(・・・敦盛様に似ているのではないか！武人というより公家に相応

しい雰囲気を持つ少年だ・・・)

こうして、忠度側は歌の出来る者 15 名、北郷側も元服が済んだばかりの少年一人を含め 15 名での酒席での歌会が始まった・・・。

城主の希望で、交互に歌を交す方法では無く、題目につき出来た者が手を揚げる形式の歌会となった。

箏の伴奏も笛の伴奏も無かったが、少しすると襖がすーと開き、鮮やかな絢模様の大島紬を着た少女二人を連れた蛇味線弾きが入ってきた。

風も無く熱気が溢れた広間は可なり暑かったが、少女らは一瞬、清涼感を与えた。

早速地元の民謡の歌踊りが伴奏付で始まった・・・。

京では聴けない南国の旋律舞踏に、忠度も高揚してきた。

ここで、忠度はこう言った。

「今度は、大島紬を題に一句、吟じよう・・・」

殆ど間髪を入れず、あの少年が手を上げた・・・。

「大島の女子ふすまに風這わす・・・・・・・・・・・・・・・・」

次に、桜島を題材に一句、と言うと、あの少年が直ぐに答えた。

「桜島煙たなびき雲散らす・・・・・・・・・・・・・・・・」

こうして、北郷側の歌い手は少年一人で担っている様な状況となってきた。。。

忠度は思った。

(平遥な言葉であるが、どれも綺麗な句だ・・・私より歌の才が有るのではないか・・・京に来て 2～3 年修学すれば相当の歌人になるのではなかろうか・・・)

盛会のうち歌会が終わらんとする時、忠度は城主にこう言った。

「あの若者は非常に筋が良い！京で 2～3 年修学を積み、歌人として一角の者になるであろう・・・帰郷したら薩摩の歌の指導者になる器だ。三位俊成殿への紹介状を書こう。」

忠度の胸の内には、竹守が一人前になれば敦盛の笛と彼の歌で二人の美しい男子の演奏が歌会の話題になるやも或いは、朝廷の神事への参加にも箔が付くのではという思いがあった。

忠度は滞在中の学費は忠度が負担する事と、最短でも 1 年は指導をして欲しい旨の内容を書き、なるべく早く上京するように促しながら竹守に書状を手渡した。

そして上京する時は、事前に忠度宛に書面を送るよう竹守に述べ伝えた。

城主の北郷も竹守も驚いたが、時の最高権力者の弟の願い、一応丁重にお受けしてその場はお開きとなった。

城主北郷は、思ってもみない方向に事が動いたので困惑したが、薩摩の芸能のレベルを高めるために、京へ修行に出す機会を与えるのも悪くはないかと考えた。それに、平家の中枢から頂いた折角の機会なので、竹守にこう言った。

「忠度様のご意向は、そなたの才を高く買われての事、如何になすべきかそなたの思う通りにせよ。」

その後忠度は、鹿児島・川内・熊本・佐賀の地で接待を受け、今度は瀬戸内の景色を右手に眺めながら無事帰郷した。

一方、京へ行く機会を与えられた竹守は、嬉しいやら困惑するやら、内心は花の都をこの目で観てみたいと思ったが、この場は、暫くは猶予の時を頂戴したいと城主に伝えて下がった。

家に帰って両親に伝えると、驚きながらも喜んでくれた。

ただ、京までゆき長逗留するには、それなりの準備が必要となるので、あれこれ整え出立出来る状況になったら行くが良いという事になった。

有島家は、御徒組では無いので当然馬を飼っていた。当時馬は非



常に大切な移動手段であり、良い馬を飼う事は自分の社会的地位を高める事でもあった。竹守は従者を従えて行きたかったが、俊成宅での長逗留は竹守一人が可能と書かれていたので、不慣れな馬の扱いに馴れてから、一騎で出立しようと考えた。

それと、俊成宅で恥をかかないように、現在思いのまま詠んでいる歌の技量を今少し高めてから行こうという思いもあった。

そうこうしているうち、三年がいつの間にか過ぎた。

1180 年春に、いよいよ出立しようかと思った矢先、数々の事件が起こって出発を見合わせる事となった。

更に 2 年が経ち 1182 年、京の神泉苑での白拍子の舞が三日三晩の恵みの雨を呼んだ・・という噂が遠く九州の南まで届いた 8 月、竹守は出立を決意した。

この時竹守は、20 歳の若武者と成っていた・・。

九月の始め頃、小倉に到達した時には馬の扱いにもすっかり慣れ、町を北に抜けて正午過ぎに港の方に出て、初めて関門海峡を眺めた・・・。

古来より船の往来が盛んで活気ある町の様子を眺めながら船着き場に着いた・・。渡し船の種類には、人を運ぶ中型船と馬などの貨物

を運べる大型船があり、今のように時刻表は無く、人や物の頭数が揃った時点で運行するというやり方であった。

大型船の船頭に尋ねると、人を運ぶ船は一刻に 2～3 回出航するが、馬を運ぶこの船は、大体一刻に 1 回位だと言うのである。

半刻(1 時間位)ほど待たねば成るまいなと思い、左手の響灘から眼前の関門海峡、右手の周防灘へと視線を移し、明日は右手に見えるであろう瀬戸内の海にまで思いを馳せていると、あの向こうに都があるのだと感じ、気持ちは高ぶってくるのであった。

怯える馬を何とか船に入れ、船は動き出した。。

海峡の対岸を眺めると、何か鮮やかな色彩がチラチラ見える。

船が中程まで来ると、それは女子の小袖である事が鮮明に見えて来た。。程なく船は対岸に到着した。

色彩豊かな小袷と白い袴の若い女子 5 人が竹守を待っていたかのように寄ってきた。。

いつから来ていたのであろうか、心地よい香の匂いがしてきて、「お武家様！今宵は私の屋敷に来てたもれ！食事もお泊まりも私がお世話致します・・・」

こう言って、7～8 cmの長さの竹に「旅籠虫の小枝」、「旅籠

彦島の漁り火」等と書かれており、5人それぞれが竹守に手渡した。

(……この様な事は日常なのだろうか？……)

彼は答えた。

「……今日中に宇部まで行かねばならぬのでな・・済まぬ・・」

後方で船を係留しながら、船頭がこう言った。

「彼女らのように旅籠付の遊女もいれば妓楼専属の遊女もいますよ、お武家様なら遊女も大歓迎でしょう……」

その日の夕刻には宇部に到着しそこで宿を取った。その後、瀬戸内の港を次々と通ったが、どの港にも遊女がたむろし、中でも風待ち港の室津や鞆の浦は街全体が妓楼と遊女で構成されているのではと思う程であった。

世の仕組みに驚いたり夜蛍の星屑の様な明りを楽しんだりしながら、9月の始めには京都の俊成宅に到着した。

## 5, 門 司

下関の港で解放された建礼門院の女官達であるが、30 人程が着の身着のまま彷徨うこととなり、その姿は余りに哀れで人々の同情を誘った。今まで京都の豪邸で平民とは異なった生活を送っていた為に自分で生計を起てる事が難しい彼女らを観て、地元の商人が救いの手を差し伸べた・・・。

とりあえず、それぞれの屋敷に引き取り何日かは保養させ、その間に彼女らを今後如何様に扱うか？考えた・・・。

そもそも京の都で選抜された美しい女子ばかりであるから、自分の店舗にお客を引き込むために、近隣の花々を摘んでこれを停泊する船舶の乗客に売らせてみる事とした。

果たして花束は飛ぶように売れた。

売れるに連れて価格も随分引上げたがそれでも売れた。

壇ノ浦で生き延びた平氏の女官がいる、それも美しい女子ばかりという噂は近隣に知れ渡っており、海ばかり見てきた乗客らは内心こう思っていた。

(平家の生き残りとは、どんな女子達だろうか？それも美人揃

いとは、一度見てみたい・・・)

当時の下関は既に大きな港町であり、食堂屋台、お土産屋、旅籠などが軒を連ね停泊する船舶も多かった。

引き取った商人らは、内心、花代以上の利益を彼女らに期待していた。自分の宿に成るべく多くのお客を引き込み、普通の宿泊に付加価値を加えて多くの売り上げを目論んだ。

昼間の商売は、大体花の売り渡しだけで終わる場合も多かったが、夕刻は、お花を船舶の乗客に売り込み、

「私の働いている旅籠があるので、今晚ぜひお泊まり下さい・・・」

等々述べて、少なからずのお客を呼び込んだ・・・。

この商いのやり方を望まれた時、彼女らは葛藤無くこれを引き受けたわけでは無かった。

内心、こう言う思いが頭を擡げた。

(私達は、仮にも天皇の御子とそのご母堂にお仕えした身、ここまで自分を貶めて善いのか・・・)

しかし、着替え一つ持たず難儀した時に衣食住を与えられ、生計の道を開いてくれた商人に異議を唱えうる者は殆ど居なかった。

(あの仕事は遣りたくない・・・だが、他に生計の道が見えない・・・)

この様にして、内心止むを得ないと思いながらも、一階でお客に  
先ず酒と地元の名産物を勧め、暫くしてお客が出来上がった頃に、  
一緒に二階に上がるという生活が始まったのである。

二階の彼女らの部屋の名は、高貴な女性が住まうという意味で、  
局(つぼね)の部屋と呼ぶ事とされた。

彼女らのそれぞれの名前を前に持ってきて、「吉祥の局」、「躑躅の  
局」等と呼ばれた訳である。

一方、門司で解放された秋貴らも、殆ど同じ生き方を選択させら  
れる事と成った。

鞍馬の麓で生まれたという事で、「市原の局」と名付けた部屋を  
あてがわれた。

初めてその部屋の中に入り、仕事が明日から始まるという時、彼  
女は何年振りかで一人の時を過ごす事となった。

あの敦盛様の死以来、余りの現実の流転の早さに、心を何処かに  
置き忘れ魂が抜け現実に付いて行けない自分がいた。

心は以前のままで現実だけが先走って行く様な心持ちでいたの  
である。

考える間もなく、この様な状況に追いやられた自分の今を認識で

きないで今日まで来たのである。

下の道路を通る酔客の声や漁師の荒々しい声がざわめきのよう  
に聞こえて来た……。

(小さい頃から随分頑張って生きてきた…そして掴んだ六波羅で  
の夢のような生活…突然、下へ下へと引きずり込まれて行った  
今まで…)

この「市原の局」の部屋の物は、あの敦盛様の部屋にあった高級  
な部屋の欄間や畳とどこか似ていた。

そう思ったとき、突然！彼女は現実をはっきり認識した。

小さい頃、けばけばしい服装をして大社の前でたむろしていた采  
女の姿が目に見えた……。

(食べることに不自由しないという事だけが唯一安心なこと…  
年老いた時や不治の病で伏した時、捨てられる運命にあるのだ…)

一人の部屋で自分の将来の姿が見えたとき、底知れぬ悲しみとや  
るせなさが襲ってきた……。

(こんな現実を決して受け入れ難い…明日には門司の東北の海に  
身を沈めよう…)

翌朝早く起き、秋貴は門司港の北端にあり海を眼前に臨む和布

刈神社の前にやってた・・・。

合掌し海に身を投げようとしたが、最後の一步が如何しても踏み出せない・・・。

(・・・どうしてだろうか？もう未練は無いはずだが・・・)

本人は気付かぬが、秋貴の潜在意識の中に実は未練は有ったのだ。10代の頃、思い掛けない幸運が突然やって来たように、旅籠とは名ばかりで実のところは妓楼とおぼしき所に住まう身となっても、突然の幸運がこの身を襲うやも知れない・・・僅かの可能性と感しても、その思いが心の底にある為に死にきれないのであった。

結局旅籠に戻り、遊女の生活が始まった・・・。

心の中では泣いている時でも、母親に言われた通り接客時には笑顔を忘れないように対応した・・・。

愛想の良さと美しさが相まってやって来るお客は増えてゆき、旅籠の主にとっては願っても無い存在と成っていった。

最初の頃より増しな事と言えば、嫌なお客は断る事も出来る様な上玉になったという事位だった。

お客が切れ、二階の窓からぼんやりと家々の瓦屋根や月を眺め



る事があった…。満月の夜等は、屋根瓦が光り遠くの港の灯りと相まって、一見、平和な港町の雰囲気醸し出していた。

そんな折りは、六波羅に居た当時、満月の晩に遠くの寺社を眺めた時、瓦屋根がきらきら灰紫色に輝いて綺麗だった事が同時に思い出され、情景が似ていれば似ている程、心が締め付けられた。

壇之浦の滅亡から 3 ヶ月ほどが過ぎた或る夕方、一階茶屋で飲食を終えた商人らを玄関に送っていると、港の方角から狩衣姿の若者が操る駿馬が一騎、こちらに向かって来た…。

(！？…雰囲気が敦盛様に似ている様な…)

彼は宿の前で止まり、馬から降りて綱木に馬を繋いだ。

「今宵の宿をお願いできるか？…先程船頭から歌舞が得意な市原という女子がここにいると聞いた…私も京で歌を修学したものでな。」

「それは光栄で御座います、私が市原で御座います。さあさあ、どうぞこちらへ…」

この時秋貴は、心が喜びに満たされてゆく事を感じた。

一階で飲食の給仕をしている時にあれこれと会話を交した。

そして、和やかに談笑している間に、つぶさに若者を観察した。  
(お顔も似ているが、それにも増して貴族的な雰囲気は余りに似ている…不思議だ…)

彼が言うには、

{鹿ヶ谷の事件の後、忠度様が薩摩に下られた時があったが、その時の歌会で望外にも三位俊成様宛の紹介状を頂いた…多くの事件が起こり直ぐ京には行けなかったが、神泉苑の神事の後、漸く京に行き弟子に成ることが出来たのだ…その後更に望外の事件が起き、今度は戻るに戻れなかったのだ…}

秋貴にとっては身内のお話を聞いている気持ちであった。

秋は思った。

(神泉苑での舞の後という、六波羅は束の間の平安を取り戻した時期…あの年は晩秋に一度だけ俊成様の屋敷にお邪魔したことが或る…そうするとあの時、彼は屋敷に居たことになる…?)

「それにしても…何という奇遇でしょうか！あの年の秋、俊成様宅に行ったとき貴方もご在宅だった事に成りますね…」

「行った時とは？…あの時そなたもあの館に居たのか？」

「はい、私は敦盛様配下の女官としてお仕えしておりました。」

「?!・・・隣の部屋から敦盛様の笛の音と可憐な歌声が聞こえて来た事が有ったが・・・あの歌声は貴殿だったのか?・・・このような事が起こるのか?・・・考えられぬ事よのう・・・」

六波羅の多くの平氏が世を去った今、当時のことを知る者は殆ど居なくなっていた訳であるから、当事者しか知らぬ事柄を話せる者同士が出会えたという事は、奇跡か神仏の恩寵かと二人には思えた。

食事が終わり、二人には話しても話しても尽きぬ話題が有った。

「そうそう、市原の局と其方の名は判ったが、自分の名は語ってはいなかったな・・・私は有島竹守と申す。」

「しかと承りました、竹守さまですね・・・ではそろそろ御二階の方に参りましょうか・・・」

竹守は、酔いも程良くまわり、本当に良い女子に巡り会ったものだと思いながら、二階への階段を登った・・・。

お互い話したい事は山のように有った。

先ず秋貴が口火を切った・・・。

「私の本名は秋貴と申します。市原と言う名は、商売上やむなく

使っている名前、どうか秋貴と呼んで下さいまし。」

「あい、分った…その秋貴という名前、以前確か聞いた覚えが  
或るな…そうだ！俊成宅で勉学中、敦盛様と忠度様のお二人  
でお越しになったことが何度か有った。今様の名手が内の女官  
の中に居るので、敦盛様の笛と忠度様の歌や私の歌で秋貴が  
歌い舞えば公家達も満足至極であろう等言っていた事を思い  
出した！…其方、その秋貴であろうか？」

「！！はい、そうで御座います…お二人がその様な事を…貴方  
か忠度様の歌で私が舞い、敦盛様の笛が加わる…お二人は亡  
くなってしまったのですね…もう二度とあんな優雅な時は、」  
ここまで言って、秋貴は嗚咽が止まらなくなった…。

竹守は続いてこう言った。

「平家勢が都落ちする時、忠度様は側近の 6 騎と共に俊成様の  
館に引き返されたのです…今生の思い出に勅撰歌集に我が歌  
を御撰頂きたいとの事でした…無論俊成様は歌集をお預かり  
致しました。私達生徒らは後方でお見送りしておりました…これ  
で思い残す事は御座いません、さらばで御座います、こう言っ  
てから立ち去る時ちらりと私の方を見たので、私は深くお辞儀

を致しました。お前はしっかり生き抜けよと伝えている様に感じました・・・「前途ほど遠し、思いを雁山の夕の雲に馳す」の句を唱えながら去って行かれました・・・馬上の後ろ姿を見詰めながら、俊成殿も「忠度様・・・」と言ったきり咽び泣いてしまいました。」  
彼は更に続けた・・・。

「一ノ谷で早朝敦盛様が奏でた曲は、俊成様宅で一度お聴きした節かと思います・・・送葬の曲でした・・・死者を哀惜する曲と思いましたが、あの朝は死を予感しご自分も一緒に送葬されたのでしょうか？・・・六波羅でお聞きした時、句での朗唱もされました。一度聞いただけですが覚えています。「陸ゆかば重なる屍・・・水ゆかば流るる屍・・・大神の辺にこそ召されん・・・安らぎ給わん」・・・悲しいです・・・」

ここまで聞くと、今まで必死で保ってきた仮面が崩れた。

竹守の胸にすがって激しく泣き止まらなくなった・・・。

余りに激しい鳴き声が二階から聞こえるので、一階に居る宿主が二階の様子を見に来た程である。

25歳になる今まで、誰かの胸にすがって思い切り泣きじゃくる事が有っただろうか？

秋貴は悲しかったが、竹守の胸の中で幸せも感じた…。

絶対的に自己を解放出来る幸せだった。

この後、話題は尽きなかった…。

竹守の胸元で神泉苑の神事における歌舞に秋貴も加わった事をささやくと、

「それは素晴らしい！100 人もの白拍子による舞とは、それはそれは壮麗であつたらうな。」

「はい、私が知る神事の中で最も雅なもので御座いました…

あの様な神事の場に私ごときが立てるなど夢の様で御座いました…」

「100 人目の静御前が舞った後に効験があつたと聞いておるが、それはおかしい。」

「はあ？それはどの様な訳で？…」

「竜神様が一番美しい女子を選ぶのであれば、其方の方が上であろう…」

「！まあ、その様な心にも無い事を…」

「其方が生き残ってくれて、本当に良かった！…薩摩へ空しく帰る途中に思わぬ幸運に出会つた…ところで、そろそろ得意の

舞を少し見せてはくれぬか？」

秋貴はゆるゆると立ち上がると、都の月の一節を披露した……。

舞が終わる頃、竹守はこう言った。

「この夢幻境を知れば、これから離れられる者が有ろうか…

私は明日薩摩に下るが、準備を整えて必ず其方を迎えに来る…」

「！？…迎えに来る…それは召使いとしてで御座いますか？」

「召使い等あり得ぬ！一緒に暮らすためじゃ…身元を引き受ける。」

こう言うと、竹守は秋貴を胸元に引き寄せた…。

「…竹守様…貴方は私を…」

「秋貴殿…其方は南国に咲く美しい花、私の手の中で永遠に咲いてくれ…」

「…秋貴とお呼び下さい…」

「秋貴…」

「竹守様…私は嬉しい…」

この夜に二人は結ばれた。

竹守は長旅の疲れもあり、この後うつらうつらし始めやがて眠り

に落ちた…。

秋貴は、貴族的で静かな寝顔を眺めながら、じわじわと湧いてくる幸福な感情を噛みしめていた。会って数時間しか経っていないのに、旧知の仲であり運命の恋人の様に感じた。

この幸運を与えてくれたのは神仏であると思い、心の中で合掌しながらやがて眠りに付いた…。

……行商人の声や早馬の通り過ぎる音が聞こえてきた…。

昨晚とは異なり、秋貴の胸に内には複雑な思いが渦巻き始めた。  
(迎えたくない朝が来た…昨晚の甘い言葉の確証は有るのだろうか?…)

秋貴が起きようとするすると竹守も目を開けた…。

「朝食の準備に一階へ行って参ります…」

彼女は小袖の襟を整えると、下へ降りて行った…。

竹守も別な思いに捕らわれていた。

(彼女は素晴らしい…何としても一緒に暮らしたい…だが…)

三年振りで故郷に戻ったなら両親は喜色満面で迎えてくれるであろう…一人息子が立派に父の後を継いでくれるものと期待しているであろう…最後の父の文には、戻ったなら会わせたい



女子がいると書かれてあった…以前家老の次女に嗜みの良い女子が居ると言われた事があるが、その女子であろうか？…)

この頃、源氏による平家狩りが始まっていた…。

それは、京鎌倉の周辺から始まり、やがて四国・九州に至るまで徹底的に行われるという情報は竹守の耳に届いていた。

今年元暦二年の早春まで、都城の北郷家は平氏の配下に有ったが、もう直ぐ源氏の配下に成るであろう事は明白であった。

この様な状況で、壇之浦の生き残りの女官を連れ帰り、私の妻にしたい等と言えるであろうか？

たった一夜の契りながら、これ以上の女子が現われる事はない共に暮らしたいと竹守は感じていた…。

竹守は、続いて思った。

(土族を捨て彼女を連れて何処かへ逃げようか… しかしそうしたら逃亡の噂はやがて北郷家の知るところとなり、有島のお家は断絶、両親は苦しみながら年老いて亡くなるであろう…あぁ苦しい……)

……やがて騎乗の竹守が去る時がやって来た。

彼は土族らしく成るべく毅然とした態度であらねばと思った…。

「必ず迎えに来る、その時まで達者で過ごせよ…私が戻るまでこの小刀を其方に預ける、無名の小刀であるが祖父の代から当家に有った物である…」

こう言って、彼は脇に差した小刀を馬上から秋貴に手渡した。

「…貴方が戻るまで、大切にお預かり致します…道中ご無事で…」

「うむ」と頷くと、彼は馬を小走りに小倉の方角に走らせ去って行った…。

人馬が段々小さくなり見えなくなるまで見守った…。

姿が見えなくなると、次の瞬間には不安が心を覆い始めた…。

竹守も薩摩に近づくにつれ葛藤は強まっていった…。

故郷が近づいた頃、これしか有るまいという方法が一瞬間いた。

(下女としてなら或いは可能やも知れぬ……)

しかし、迎える手順を順を追って考えて行くと、不可能である事を思い知らされた。九州を南に下るほど方言は強くなり、教養の低い平民の中には標準語で話すこともままならない者多かった。竹守が幼少の頃島から来た下人が有島家にいた事がある。隣家の下人と彼が話すのを聞いたことがあるが、全く意味が判

らなかった。しかも下人の大半は近隣か稀に南西の島からやってきた者達だった。

こうして、優雅な京言葉や公家の言葉を話す女子を下女として家に置きたいという望みも絶たれた…。

一方、秋貴の葛藤と不安は竹守以上であった。

(本当に戻ってくれるのだろうか…いや、竹守様は嘘を言うお方ではない…) 無限の堂々巡りが続いた…。

(幸福は何時も断ち切られる…永遠にあの至福の時を続ける方法は無いものだろうか?…)

幸福の絶頂から不幸の谷底へ激変する自分の運命を呪ったり嘆息したりしながら、一月ほど経った…。

彼女は思い当たった。

(幸福な二人のまま永遠に時を止める方法…そこで人生を止める事だ! あの夜、安らかに眠る竹守様を殺し、私も死ぬ…どうなるか分らぬ人生に怯えながら暮らすより、幸福なまま自ら死を断ち切る…これ以外の方法は無い!)

秋貴は考え得る最良の方法を今描くことが出来たのだ。

その後秋貴は待った…。

南の方角、小倉の方角から単騎の蹄の音が聞こえると、もしや  
と思い、時に一階の暖簾の隙間から覗き、時には二階の窓か  
ら南の方を眺めた。

待てど暮らせど来ない人を待つのは辛い……。

秋貴はその状態を 3 年ほど続けた……。

母親のこともよく思い出した。

(壇之浦で海の藻屑と消えたのではないかとどれ程心配してい  
るだろうか……私を見たら、死なずに生きていれば遊女であ  
っても良かったと言ってくれるだろうか？……)

28 歳の頃、市原の局の仕事は終わったが宿を出されることは無  
かった。

彼女の歌舞の技術が特別優れていたもので、門司や近隣の遊女や  
白拍子に今様や田楽の技術を教えながら同じ二階に暮らす事を  
許された。

それから数年が経った頃、彼女は重い病にかかった……。

病が重くなり寝たきりになった時にも、下から単騎のひずめの音  
が聞こえると、彼女は「もしや……」とか「誰か確かめてたもれ……」等  
と言い、死の間際まで望みを捨て切れずにいた。

不幸のまま死なんとしている自分が悔しかった。

今度は、必ず幸福なままで時を止めてやると思った…。

息を引き取る時の言葉は、

(…竹守様…母上様…お会いしたい…)

歌舞を学んでいる数人の遊女や白拍子達がその死を看取った。

秋貴の事情を知る彼女らは皆涙した…。

建礼門院にも劣らぬ数奇な運命を辿った一女官の人生はここに  
終わったのである。

竹守の方であるが、武士の因習には逆らえず、帰薩の翌年には  
家老の次女を正妻として迎えた。

彼も心の中では、秋貴を思わぬ日は一日とて無かった。

どれ程待ち焦がれているだろうかと思うと、心は苦しく、済まない  
済まないと心の中で繰り返した…。

正妻となった家老の次女は姿形は平凡であったが、気立ては良い  
女子であった。彼女が献身的に尽くしてくれればくれる程、自分の  
心が秋貴に有る事を後ろめたく感じるのであった…。

その後有島家は存続し、16世紀には川内市平佐町に移った…。

先祖から続く文学的芸術的才能は近世に至るまで引き継がれ、有

名な作家画家俳優などを輩出するに至った。

人間の霊は不滅であり、その後二人は…二人の霊魂は、何度も生まれ変わりを繰り返した…。

そして、お互いに別の名前を持ったそれぞれの人生の時においても、二人は出会う事があった。

その中でも、秋貴、そして竹守という名の生を受けた人生が、彼女と彼の潜在意識に最も強烈な影響を与えたのである。

## 6, 軽井沢

時は移って大正 12 年 6 月 9 日夜、じとじとした雨が降る中、秋子は有島武郎と共に軽井沢の浄心荘のテラスの前までやって来た。

恍惚のまま時間を止めようという思いでやって来たので、下着まで少し雨が染み込み嫌な気持ちが少し起こった。

武郎さんも少し嫌な感じを持ったのではと内心思った。

それと、もう少し早めにここに到着して、何度かお茶を楽しんだこの素敵なテラスで最後の飲み物を味わってから最後を迎えたいと思ったが、それも叶わない事となってしまった。

でもそう言った事は些細な事に違いないと無意識に思い、彼も秋子も何も言わないで一階へと入って行った。。

一階玄関口に入ると、武郎はコートを脱ぎ、

「二階へ行こう。。」と言った。

無論、秋子も言われた通りに振る舞い、武郎の背中を追った。。

この何気ない言葉にさえ、以前にも言われたことのある言葉のよ

うに感じ懐かしい感じがした。

初めて有島武郎に会った時に、他の人間に無い懐かしさと安心感を覚え、その感情は益々大きくなっていった。。

武郎と心中を決意する直前までこの様に感じていたが、心中を決心した時からは、別の感情が襲った。

それはやっと求める物を掴んだ安堵感とこれを守る切迫感だった。

秋子は思った。

(ごく小さい頃から、何かをし忘れた様な掴み損ねた様な思いが心の底にあって拭えなかった。。年と共にその思いは強くなるばかりで、生きる時間が長くなる程、何か恐ろしい物が近付いて来る様に感じた。。だから大事な物を掴んだら絶対に離してはいけない。。)

それに秋子は、年老いた自分というものを想像出来なかった。

目的の物を掴んだら、その状態で直ちに時間を停止する。。という思考は、彼女の潜在意識に植え付けられていたからである。

だから今は、とうとうここまで来た。。心の中に在ったやり残した思いが完結するという達成感の様なものが心を覆っていた。。



陶醉と歡喜を心と体に刻み込んで終わりを迎えたいと思い、二人はまず二階の寢室へ行き、ドアを閉めた……。

次に、余韻が覚めやらぬうちに遺書等を書き残すため、二階の書齋へ向かった。

前もって話し合った通り、内容はおおかた前日までには出来上がっていた。

残された者達が驚き悲しむ事は二人とも重々承知していたが、これ以上生きてもこの至福の心持ちは今が頂点であり、人生を延ばせば延ばすほど弱まってゆくのだと感じていた。

自分達の生き方は自分達だけのもの、どうか自分達で決めさせてくれと皆に言いたかった…。

だからどうか願いを遂げさせてくれという思いで、遺書や辞世の句を二人はしたためた。

書き終えるのに随分時間を費やしてしまい、丑三つ時となってしまう…。随分遅くなってしまったと思ったが、でも、全き静けさの中で永遠の陶醉と静寂に向かう事は、相応しいと思った…。

武郎は、二階の物置にあらかじめ用意しておいたロープを取りに行行った…。

その間に秋子は、椅子を二台、所定の場所に移動して並べた。

戻った武郎がロープを取り付ける時、秋子に

「椅子に上がって立ってみて」と言った。

「秋子の首の位置に高さを合わせるよ、お前は私より少し低い位だから、私が少し屈んで椅子を外せばいい…」

これで、二人の顔の高さは同一になる筈だった。

最後まで二人一緒に有りたいとの武郎の配慮だった。

…二人は、椅子に登り、首に縄を掛けた…。

最後に、武郎はこう言った。

「永遠の平安まで5分間の苦しみを我慢しよう…私が目配せをし、一二の三で、椅子を外して！」

秋子は頷いた…。

「…では、行くよ…いち、にの、」

三の言葉と共に、二人は椅子を外した…。

数百年前からの願望は、ここに完遂したのである。